

みなとMIYOMACHIケンチュクさんぽ vol.14

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

南京町の赤

元町駅から海岸までの多彩な景観は神戸でも一番の魅力ではないでしょうか。南京町はその中で異彩を放っています。東西南に三つの大きな門を有し、東西200m、南北100mの範囲に中華料理・中国物産店が100ほどあります。3階建・4階建・5階建が多く、いろんなところが赤い。青天井の歩行者専用道となっている日本では希少な商店街です。南京町広場も、どこにでもありそうで、大都市にはああいう場所は少ないのです。

南京町の歴史については知る人ぞ知ることですが、簡単にながめてみましょう。明治になって外国人の居留地は鯉川筋と西国街道と現在のフラワーロードに囲まれた範囲でした。友好条約をむすんでいたのは蘭・英・米・独・仏で、清国はそうでなかったため、その西側に華僑が住み始めました。乙仲通あたりには華僑を含む貿易商・仲買商が立地しました。乙仲通あたりも華僑の活躍の中心だったのです。

その北側の南京町あたりには雑貨商が自然発生的な国際マーケットを生み出します。1924年生まれの作家陳舜臣は戦前の南京町をよく知っていて、狭い道に両側から日よけをかけ渡してあってうす暗く、漢方薬と薄荷の混じったような独特のにおいがあってと回想しています(『神戸ものがたり』)。

西安門を海岸通まで南に行くと、神戸中華

総商会ビルがあります。その2階に1979年にできた神戸華僑歴史博物館があります。ひとつの教室ほどの広さしかありませんが、見応えがあり、明治以降の華僑の活躍を追跡することができます。博物館に加えて『南京町と神戸華僑』(呉宏明・高橋晋一編、松籟社、2015年)という立派な本があります。博物館の名誉館長の藍璞(らんぼく)さんはそのなかの座談会で「グレート・チャイナタウン」という表現を使っています。神戸閩帝廟や神戸中華同文学校などの華僑関連施設は山手にありますし、比較的大きい中華料理店もJRや阪急よりも北にかなりあります。

神戸の町を俯瞰してみると、南京町だけでなく、背景にあるより広い中国社会の存在を感じます。ハイカラな西欧風に重なって、中国風が彩りを重ねているのが神戸です。

1945年の神戸大空襲で南京町のあたりは壊滅的な被害を受け焼け野原になります。この本によると、大戦後はバーが多く危険な雰囲気のある場所だったようです。1960年代には貨物輸送のコンテナ化により、乙仲通はじめ港町一帯は激変します。解と小仲買業者の世界ではなくなったのです。

南京町商店街振興組合が、1982年から中国イメージのゲート・街路・広場を作ることに着手します。現在の中国風をウリに観光地となることを決意してきあがったのが、いまの南京町です。一から作ったといってもよい新しい景観です。戦前にできていた国際マー

ケットの景観とは不連続なものですが、その記憶が別の形でいまの南京町に噴出したものと考えてもいいでしょう



南京町広場



西安門



閩帝廟

印象ぶかいチャイナタウン

サンフランシスコにある世界最大のチャイナタウンを見て驚きました。中華料理店の集積というようなものではないのです。中国人の生活の場となっていて、中国語の新聞が発行されていました。イギリスのロンドンのチャイナタウンも大きくて、観光客のためというより、現地中国人社会の食卓として中華料理店はあるという感じです。ロンドンの道はランダムな網の目のようで、ピカデリー・サーカスの近くであって、都心部を歩いていると、いつのまにかチャイナタウンと出会ってしまいます。

リバプールではクリスマスのころの深夜、大聖堂から海辺のホテルに帰ろうとすると、大きな紫色に光るものが見えました。これはチャイナタウンの楼門で世界最大だということです。バーミンガムは南アジアからの移民が多く、インド料理店が幅をきかせているのですが、それでも中央駅の近くのバーミンガム発祥の地にはしっかりと集積を作っています。それぞれの起源は多様なのですが、いずれも大都市の中心部に町を作っているのです。華僑のたくましさ、大きな商業集積をうみだしました。



ロンドンのチャイナタウン



バーミンガムのチャイナタウン

昨今は日本中で「賑わい」をことさら動機とする開発構想がうちだされています。日本の

失われた30年のなかで、賑わいこそ経済発展だという発想があるからでしょうか。ただ南京町を見ていると、賑わいをつくりだすなら、ここを見習った方がいいといえるでしょう。高層建築が建って、自動車道や駐車場が整備されても、賑わいは呼び起こされないと知るべきでしょう。深い歴史に裏付けられない浅いテーマを設定しても賑わいは生み出し得ないことを学ぶべきでしょう

神戸市の景観形成地区ともなり、そのデザインコードでは、南京町では中国風建築に代表される異国情緒を醸すこととされています。広告物は高彩度が望ましいとのこと。これが現在ある景観を導きました。意識的に作ったようで、自然発生的なデザインも垣間見えます。元町商店街や乙仲通と合わせて、神戸のディープな景観を発展させていってほしいものです。



中林 浩(なかばやし ひろし)

2021年3月まで神戸松蔭女子学院大学教授/博士(工学)/都市計画学や景観問題の研究